懐かしい15の童謡・唱歌

私は「団塊の世代」です。子供の頃,教科書で習った記憶に残っている日本の古き良き懐かしい童謡・唱歌のメロディーを時々口ずさんでおりますが歌詞を忘れている歌があります。今の 20 代、30 代の世代は、かっての日本の風景や社会情勢、人々の心も今の時代に合わなくなっている歌詞があるので歌を知らないようです。各歌のエピソードを書き込み、15曲の歌詞の風景と状況を切手と切手の図柄で表現しました。思い出して15の曲を歌ってみて下さい。

目　次

タイトル…… 1

春の歌　おぼろ月夜……2

箱根八里……3

みかんの花咲く丘…… 4

夏の歌　汽車ぽっぽ……5

この道…… 6

蛍…… 7

われは海の子…… 8

秋の歌　見てござる…… 9

虫のこえ…… 10

叱られて…… 11

故郷の空……12

冬の歌　冬の星座……13

冬景色……14

お正月…… 15

冬の夜……16

春の歌　1 おぼろ月夜

日本を代表する名唱歌、日本の春は「霞むんでいる」のです、空も空気も景色もかすみの中にある、1番の歌詞も色彩にあふれている。まっ黄色な菜の花畑、しずむ夕日の茜色、白く照らす夕月、すべて霞んでいる。美しすぐるほどの歌詞を知ることで、日本の春とは本来こういうものなのだと感じます。この歌は「霞みか曇か」「さくら」とメロディーが区別つかないと今の若い人は聞こえるようです。

作詞／高野辰之
作曲／岡野真一

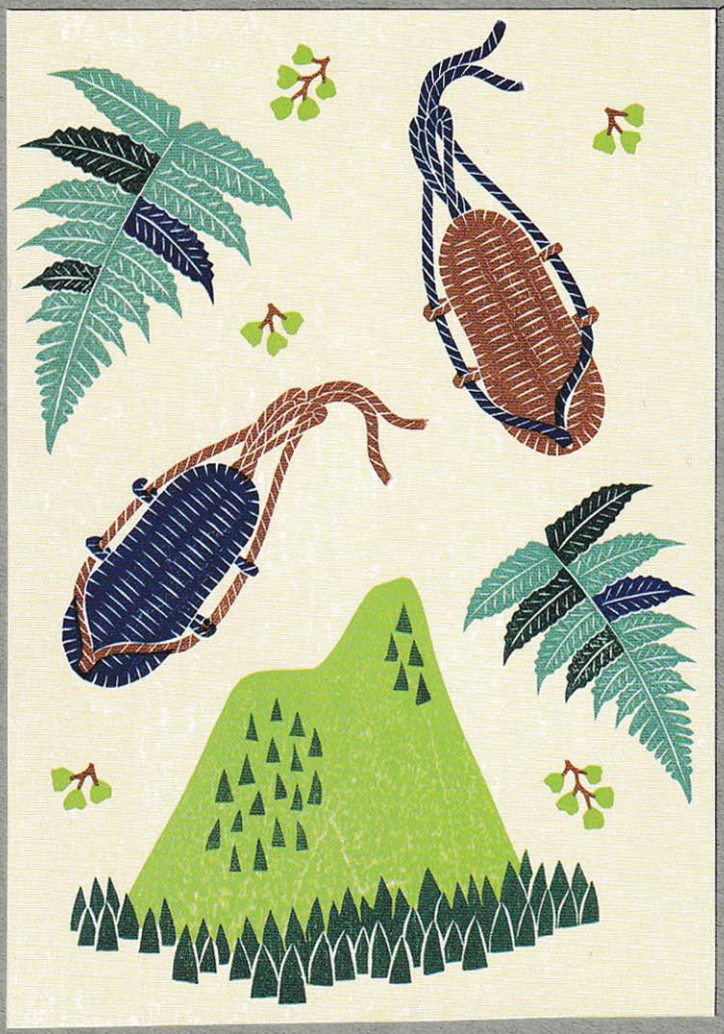
1. 菜の花畑に　入り日薄れ
　見わたす山の端　霞ふかし
　春風そよふく　空をみれば
　夕月かかりて　におい淡し

2. 里わの火影も　森の色も
　田中の小道を　たどる人も
　蛙のなくねも　かねの音も
　さながら霞める　おぼろ月夜

春の歌　2 箱根八里

「箱根八里」の歌詞は小学生に理解できるものではないのだが、「函谷関も物ならず」は「箱根の険しさは中国の函谷関など問題にならない」という意味です。「羊腸の小道」は「羊の腸のように曲がりくねった細い道」で苔でつるつる、岩も多い危険な道を昔は第一章で武士が高下駄で自在にかっ歩していた。第二章「今の箱根」は猟師が猟銃を背負い草履がけで小道を踏んでいる一人で万人の敵でも退けてしまう、「昔の武士というものは、こうだったのだと」歌っている。

作詞　島井　まこと
作曲　滝　廉太郎

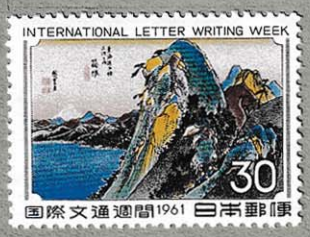


第一章　昔の箱根

箱根の山は　天下の険
函谷関も物ならず
万丈の山　千任の谷
前に聳え後ろに支う
雲は山をめぐり　霧は谷をとざす
屋根瓦苔むす杉の並木
羊腸の小道は苔滑か
一夫関に当たるや万夫も開くなし
天下に旅する剛毅の武士
大刀履に足駄がけ
八里の岩ね踏み鳴す
斯くこそありしか往時の武士

第二章　今の箱根

箱根の山・・・七行まで同じ
山野に狩りする剛毅の壮士
猟銃肩に草じがけ
八里の岩ね踏み鳴る
斯くこそありけれ近時の壮士



春 の 歌　3 みかんの花咲く丘

20代、30代の若い人はこの歌を知らないようです。教科書に出ている『故郷』、『赤とんぼ』は歌える、習うから歌えるそうです。この歌もとうに消えた名曲です。この歌は「母の日」のベストワンだと思う、歌詞を読むと一番と二番は「母」という言葉はなく情景描写の詩、三番でこの丘は「お母さんと来た場所」お母さんと一緒に眺めた、「母」への思慕のしみいる歌詞です。

作詞　加藤省吾
作曲　海沼　実

1.　みかんの花が　咲いている
　　思い出の道　丘の道
　　はるかに見える　青い海
　　お船が遠く　霞んでる

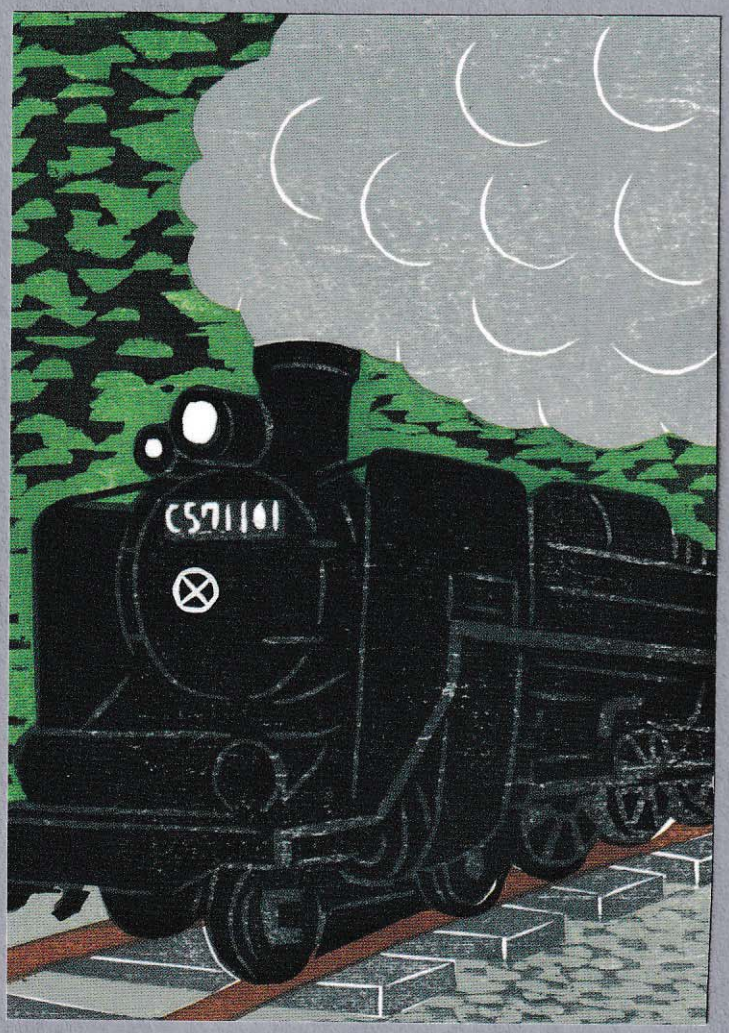
2.　黒い煙を　はきながら
　　お船はどこへ　行くのでしょう
　　波に揺られて　島のかげ
　　汽笛がぽうと　鳴りました

3.　いつか来た丘　母さんと
　　一緒に眺めた　あの島よ
　　今日もひとりで　見ていると
　　やさしい母さん　思われる

夏の歌　1 汽車ぽっぽ

現代の新幹線は窓も飽かない、スピードのキーンと音で一瞬通り過ぎる。シュッポ、シュッポの蒸気機関車はコンピューターのない時代に人の手で石炭をくべ重油を燃やし、客の為ひたすら愚直に走り続けた昭和の機関車、車窓からからの眺めは歌詞のとおりでしょう。

作詞／冨原 薫
作曲／草川 信



1. 汽車汽車　ポッポ　ポッポ
シュッポ　シュッポ　シュッポ
ぼくらをのせて　シュッポ
シュッポ　シュッポッポ
スピード　スピード　窓のそと
畑も　とぶとぶ　家もとぶ
走れ　走れ　走れ
鉄橋だ　鉄橋だ　たのしいな

2. 汽車汽車　ポッポ　ポッポ
シュッポ　シュッポ　シュッポ
汽笛をならし　シュッポ
シュッポ　シュッポ　シュッポッポ
ゆかいだ　ゆかいだ　いいながめ
野原だ　林だ　ほら山だ
走れ　走れ　走れ
トンネルだ　トンネルだ　うれしいな

夏の歌　2 この道

美しい曲です。作詞・北原白秋、作曲・山田耕作。日本の至宝です。歌の一番と二番は「あかしや」「白い時計台」から札幌に旅した頃の詩、三番と四番は熊本県南関町界隈だとされ、母の故郷を懐かしむ、そんな感情が詩にこめられているように思います。「日本の歌百選」に選ばれた名曲です。

作詞　北原　白秋
作曲　山田　耕作

1. この道は　いつか来た道
ああ　そうだよ
あかしやの花が咲いてる

2. あのお丘は　いつか見た丘
ああ　そうだよ
ほら　白い時計台よ

3. この道はいつか来た道
ああ　そうだよ
お母さまと馬車で行ったよ

夏の歌 3蛍

都心のホテルが催す「蛍の夕べ」はとてもきれいだが、この歌のように川ばたの柳に止まって眠っていて、夕闇が寄せたり三日月が隠れる頃になると、飛んで出てくる蛍、闇が深まるにつれ、次から次とユラーリユラーリと川端に集まって来る。歌の通り「かなたこなたに友をよび集い」どんどん数がふえる、幻想的な風景の詩です。

作詞 井上 赳
作曲 下条 皖一

1．蛍のやどは川ばた柳
柳おぼろに夕なみ寄せて
川の目高が夢見る頃は
ほ、ほ、ほたるが灯を灯す

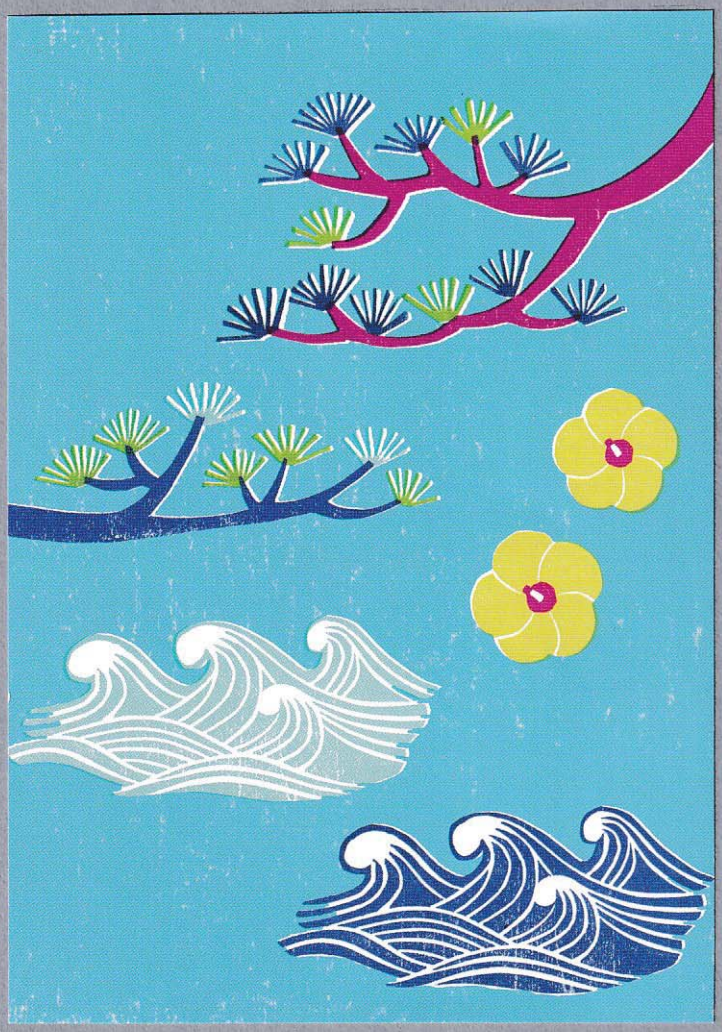
2．風そよぐ、 柳もそよぐ
そよぐ柳に蛍がゆれて
山の三日月隠れるころは
ほ、ほ、ほたるが飛んで出る

3．川原のおもは五月の闇夜
かなたこなたに友よび集い
むれて蛍の大まり小まり
ほ、ほ、ほたるが飛んで行く

夏の歌　4 われは海の子

この曲名は「海に育てられた男」の意味あいが強い。歌詞を読むと、海こそが自分を強く、雄々しく育ててくれたという気骨がわかる。二番には、生まれてすぐに使う初湯は海水で、子守歌は波の音だった。海が男児を輝くばかりの青年にしてくれたのです。この歌は実は七番まである。何年も海で鍛えられたお蔭で、腕は鉄より堅く、肌は赤銅色に焼けている、海で育った男だから。

文部省唱歌



1．我は海の子白浪の
さわぐいそべの松原に
煙たなびくとまやこそ
我がなつかしき住家なれ

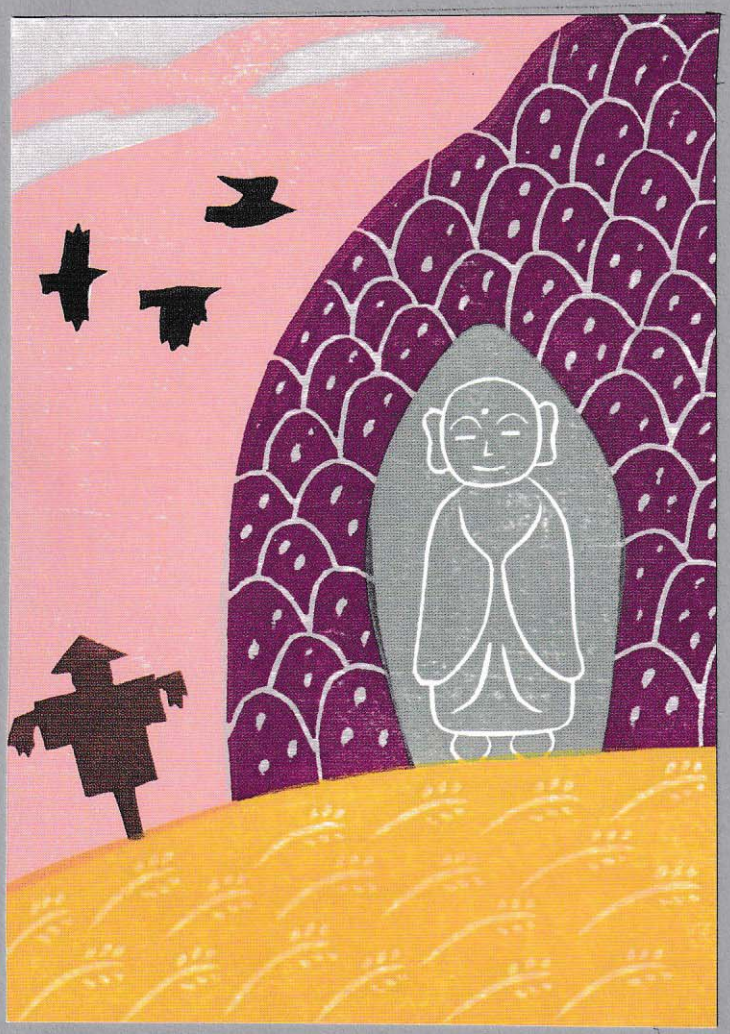
2．生まれてしおに浴して
浪を子守の歌と聞き
千里寄せくる海の気を
吸ひてわらべとなりにけり

3．高く鼻つくいその香に
不断の花のかおりあり
なぎさの松に吹く風を
いみじき楽と我は聞く

秋の歌　1 見てござる

この「観てござる」という歌は、昭和二十三年にできたものであり、今では子供たちばかりではなく、年代によっては大人も知らない。でも、お地蔵さんを知らない人はいないでしょう。
地蔵は子供に近い姿、表情をしていることがおおいため、非常に親しみやすい。ところが、地蔵とは大変な力を持つ菩薩なのである。

作詞　山上　武夫
作曲　海沼　実



1. 村のはずれの　お地蔵
いつもにこにこ　見てござる
仲良しこよしの　じゃんけんぽん
ホイ　石けりなわとび　かくれんぼ
元気に遊べと　見てござる
ソレ　見てござる

2. たんぼたなかの　かかしどんは
いつもいばって　見てござる
チュンチュンバタバタ　雀ども
ホイ　お米をあらしに　来はせぬか
お肩をいからし　見てござる
ソレ　見てござる

3. 山のからすの　かんざぶろうは
いつもカアカア　見てござる
おいしいおだんご　どこじゃいな
ホイ　お山の上から　キョロキョロと
あの里この里　見たござる
ソレ　見てござる

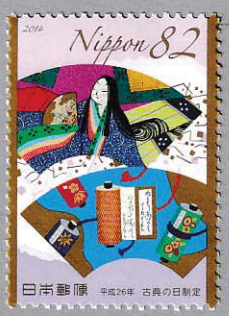
秋の歌　2 虫のこえ

日本人は平安時代から虫のこえを愛してきました。『源氏物語』第三十八は「鈴虫」です。出家して尼になった女三宮を光源氏が口説くのだが、五十歳の光源氏は二十四歳のために、庭に松虫や鈴虫を放つ。それらが一斉に鳴く秋の夕暮れに女を口説く。老いてもさすが光源氏です。虫の声を愛する日本人の自然と共に感じる感性に共感致します。20 代、30 代でもこの歌は歌えるようです。

文部省唱歌

1．あれ松虫が　ないている
チンチロチンチロ　チンチロリン
あれ鈴虫も　鳴きだした
リンリンリンリン　りインリン
秋の夜長を　鳴き通す
ああおもしろい　虫のこえ

2．キリキリキリキリ　こおろぎや
ガチャガチャガチャガチャ　くつわ虫
あとから馬おい　おいついて
チョンチョンチョンチョン　スイッチョン
秋の夜長を　鳴き通す
ああおもしろい　虫の声



松虫

鈴虫

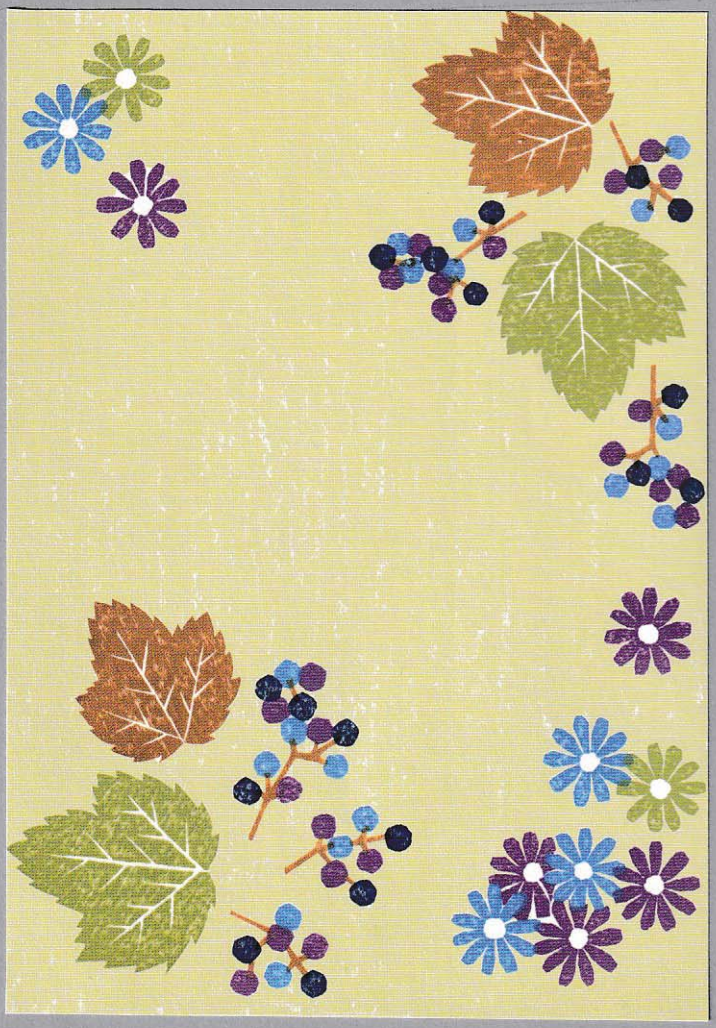
くつわ虫

馬おい虫

秋の歌　3 叱られて

この童謡を知っている人は、六十代から上でしょうか。聴くたびに悲しくなって寂しくなってきます。挿絵に描かれた、女の子が背中に赤ん坊を背負い、ねんねこ半てんを着て、赤ん坊をあやすためのオモチャを手に持っている姿。テレビドラマ「おしん」の時代です、奉公に出された子供たちはたくさんいたでしょう。1番の「こんときつねが　なきゃせぬか」の歌詞はきつねでもいいから母の声が聴きたい、会いたいの思いだったでしょう。

作詞　清水　かつら
作曲　弘田　龍太郎



1．叱られて叱られて
あの子は町まで　お使いに
この子はぼうやを　ねんねしな
夕べさみしい　村はずれ
こんときつねが　なきゃせぬか

2．叱られて叱られて
口には出させねど　目になみだ
ふたりのお里は　あの山を
超えてあなたの　花の村
ほんに花見は　いつのこと

秋 の 歌　4 故郷の空

「故郷」を歌った名曲は数多い。日本人に最も愛され、知られているものは「故郷（ふるさと）」でしょう。「うさぎ追いしかの山・・・・」の歌い出しと、澄んで美しいメロディ。「故郷の空」の原詩はスコットランドの国民的詩人ロバート・バーンズが書いた欧米では「春歌」とされた。明治二十一年、大和田建樹と作曲家の奥好義がこの旋律に合わせて、「故郷の空」を作った。
学校教材として唱歌集に入った。

スコットランド民謡
作曲　大和田　建樹

1．夕空はれて　あきかぜふき
　つきかげ落ちて　鈴虫なく
　おもえば遠し　故郷のそら
　ああ　わが父母　いかにおわす

2．すみゆく水に　秋萩たれ
　玉なす露は　すすきにみつ
　おもえば似たり　故郷の野辺
　ああ　我兄弟　たれと遊ぶ

冬の歌　1 冬の星座

この歌はw・sヘルスの詩と曲、ヘルスの原稿は、ありきたりなラブソング、直訳すれば「愛しているよ。ダーリン」、「お前は俺の世界のすべてさ」とかの詞が並ぶ。これを堀内敬三が訳し曲にふさわしい別作品を書き上げた。中でも2番「無窮をゆびさす　北斗のはり」北斗七星は七つの星で柄に当たる星が一昼夜に十二方向に指す。これを堀内は「北斗のはり」と書いた。

作詞　堀内敬三
作曲　w・s・ヘルス

1．　木枯らしとだえて　さゆる空より
　　地上にふりしく　くすしき光よ
　　ものみな憩える　しじまのなかに
　　きらめき揺れつつ　星座はめぐる

2．ほのぼのあかりて　流るる銀河
　　オリオンまい立ち　スバルはささめく
　　無窮をゆびさす　北斗のはりと
　　きらめきゆれつつ　星座はめぐる

北斗七星
おおくま座の腰から尻尾を構成する一部である七つの恒星からなる星の列

冬の歌　2冬景色

平成五年、国語学者の金田一春彦は、皇后陛下時代に「あなたの好きな童謡、唱歌は何ですか？」と質問され、皇后陛下は「おぼろ月夜」と「冬景色」とお答えになった。金田一も歌詩が日本画でも見るような、人生を美しく描いていった「冬景色」が大好きだった。六五調の節回しとリズミカルな三拍子が「日本画のように美しい行進曲」だと思います。

文部省唱歌

1．さ霧消ゆる　港江の
　船に白し　朝の霧
　ただ水鳥の　声はして
　いまだ覚めず　岸の家

2．島鳴きて　木に高く
　人は畑に　麦を踏む
　げに小春日の　のどけしや
　かえり咲の　花も見ゆ

3．嵐吹きて　雲は落ち
　時雨降りて　日は暮れぬ
　もし炭火の　漏れ来ずば
　それと分かじ　野辺の里

港江は港へ入る入江

かえり咲は
2度咲き花（桜）

冬の歌　3 お正月

平成十八年に「日本の歌百選」に選ばれた名曲です。この歌も、かってのように子供たちが日常の中で弾んで歌うことはなくなった。その理由は歌詞が時代からかけ離れている点、明治三十四年に発表されている。この時代と現代がもっとも変わったのは「ハレ」と「ケ」の一日の境界線が、薄くなり今や、毎日が「ハレ」みたいなもので「もう幾つ寝ると」など指折り数えて待つ子がいるのでしょうか？

作詞　東　くめ
作曲　滝　廉太郎

1. もういくつねると　お正月
お正月には　たこあげて
こまをまわして　あそびましょう
はやく来い来い　お正月

2. もういくつねると　お正月
お正月には　まりついて
おいばねついて　あそびましょう
はやく来い来い　お正月

冬の歌　4 冬の夜

「冬の夜」はとてもあたたかな名曲です。明治四十五年に「文部省唱歌」として発表されたもので当時の家はエアコンやアルミサッシがあるわけでもなく、どれほど寒かったかと思う。まして夜である。外は吹雪いている。この家も囲炉裏だけが暖房なのだ。なのにあたたか印象がするのは、家庭、華族の本来的な姿を描いているからでしょう。母は繕い物をしながらもうすぐ「春が来るよ」という。

文部省唱歌

1．燈火ちかく衣縫う母は
　春の遊びの楽しさ語る
　居並ぶ子どもは指を折りつつ
　日数かぞえて　喜び勇
　囲炉裏火はとろとろ　外は吹雪

2．囲炉裏のはたに縄なう父は
　過ぎしいくさの手柄を語る
　居並ぶ子どもはねむさ忘れて
　耳を傾け　こぶしを握る
　囲炉裏火はとろとろ　外は吹雪